



高橋 則之様

拝啓 卯の花に夏を思う頃となりました。いかがお過ごしでしょうか。

さて、こんな穢れた男からの手紙など君は破り捨ててしまいたいと御思いでしょうが、哀れな私の人生に免じて少しでも時間を割いてはくれないでしょうか。

単刀直入に申しましょう。私は今、貴殿、この呼び方はあまりにも他人行儀すぎますね。君が知っている通り、死刑という十字架を背負って牢に入っている身の上です。

何故、私がこんな境遇にあるのか君は新聞や噂話などで全て把握していると思います。

けれど、これから死にゆく男への情けとして私の話を聞いてほしいのです。

確かに私は人を殺しました。恨みがあったわけではありません。私が昔も今も変わらず貧しいのは変わりありませんでしたが、私が殺した男は不運にも裕福でした。口さがないものたちは、きっと金目当ての殺人だと嘲笑ってまるでそれを真実だと思っているのでしょうか。だが真実は違います。

金の問題などではありません。

家賃を取り立てに来た男はしたたかに酔っておりました。酔った勢いで私に罵詈雑言を浴びせ、ついには私の産まれを非難したのです。

ああ、どうして許すことが出来るでしょう。この何十年も同じように差別に苦しむ同郷の仲間を見てきたのです。酔っていたとはいえ、私には聞き流すことなど不可能でした。

そして君が知っているように、私は彼を殺しました。皆に鉄のようだと言われた、これだけは誇っても良いでしょう、立派な二つの拳（使い方さえ間違えなければ私はもっと違う人生を生きたいでしょうね）で彼を滅多打ちにしたのです。

産まれた場所が違う、それが何だというのでしょうか。仕事は何だというのでしょうか。この世に必要とされている仕事は全て尊いものだと私は信じております。例え、それが牛の皮を剥ぐ生臭い仕事であったとしても、です。今はもう、世の中は我々を解放する方向へ進んでいるようで、私は安心して牢の中に閉じこもることが出来ます。

しかし、私がこの度君に伝えたい用件は差別も何も関係ありません。

君は覚えているでしょうか？たかしくんです。信じてもらえないかもしれませんが、私はこの檻にあってたかしくんと再会したのです。

始まりはある夜のことでした。死刑が決定し、独房に移された私はその夜からひどい高熱に悩まされました。死への恐怖と、犯した罪の罪悪感が一度に押し寄せてきたのです。幸いなことに私は一人身で、親類縁者もほとんど死に絶え

ておりますので、迷惑をかける相手がおられません。それでもやはり、死は怖いものです。死ねば差別からも解放されて、親兄弟がいる所へ行けるというのに。私はとんだ臆病者です。

高熱が続き、私の瞳が独房の闇と同化した頃に天井にぼんやりと白いものが見えたのです。私は気力を振り絞って何があるのか見極めようと思いました。

ひどい驚きに打たれた私の心情をここに書き現すことができたなら、どんなに良いでしょう！

白い物体は、人の形をしており、天井から突き出るようにぶら下がっています。物体には顔があり、腕がありました。

たかしくんです。

小学生の時に別れたままのたかしくんが上半身だけを天井から突き出して、私を見ているのです。私は驚きました。何よりもたかしくんがまだ子どもの姿をしていることに激しい衝撃を受けました。

私はそのまま気絶したようで、気がつけば熱が下がり朝を迎えていました。たかしくんは幻であったのかと思ったのですが、その夜たかしくんは私の枕もとに立ちました。昔と同じ人懐こい笑顔で私を見ているのです。

私は飛び起きました。たかしくんは笑いながら「遊ぼう」と言いました。

昔と変わらない舌足らずな話し方がひどく懐かしくて私は涙をこぼしました。

言うまでもなく、私は独房に入れられた囚人です。たかしくんのような無邪気なこどもが紛れこむような場所ではありません。私は熱のせいで脳をやられてしまったに違いないと思い、懐かしい再会を悪夢のように楽しもうと考えたのです。それほどに私は孤独でした。もう誰も私に声をかけてくれることなどないのですから。

たかしくんがベッドに腰をかけて、私が床に座り、とりとめのない話をしました。よく飛ぶ竹トンボの作り方や飛ばし方。近所の綺麗な女の子の話。秘密基地の話。たかしくんが持っていた将棋で朝まで指しました。

君も覚えている通り、たかしくんは他より裕福な家庭の子どもでしたから私たちの持っていない遊び道具を持っていました。よく遊ばせてもらいましたね。たかしくんは優しい性格でしたから、自慢したり独占したりすることなく、常に気前よく玩具を私たちに貸し与えてくれました。

将棋を指している内に私は眠ってしまったようで、目を覚ますと、ああ、何ということでしょう。ベッドに掛けてある布に青いしみがあるのです。私は恥ずかしさで顔が熱くなりました。この年になっておねしょをしたのだと、どうしてどうして信じる事が出来るのでしょうか！当然、私は笑いものになりました。

看守は私が死刑への恐怖のあまり漏らしたと大声で言って回り、代えの布をもってきあげよう、坊っちゃんなどと私を辱めました。ひどく屈辱的ではありましたが、事実布には隠しきれないしみがあるのです。私は黙って屈辱を受けました。

しかし、本当に恐ろしいのはその後に起きたのです。

看守が顔色を変えて私に布を投げつけてきました。無防備にも、わざわざ独房の扉を開けて入りこんできました。顔色は青い絵具を塗ったようで、唇は震えています。何があったのだろう、もしや私は今日死ぬのだろうか、と考えておらずと、看守は

「一体、何を布にかけたのだ！」怒鳴りつけて布の一部分を指しました。

布には青いしみが消えずに残っていました。触るとまだ濡れているのです。その場所は、たかしくんが座っていた場所でした。

実はこの事件が起きるまで私はたかしくんを、自分の夢だと考えていたのです。死の恐怖から逃げ出すために、希望

に満ちあふれた少年時代の夢を見ていると思っていました。たかしくんが現れたのは、私の楽しい思い出の終焉と彼が重なっているからだばかり考えていました。

しかし、たかしくんはどうやら本当に私の前に現れたようなのです。濡れた青いしみを私は指でなぞりました。そこは信じられないほどに冷たく、まるで氷を撫でているようでした。以来、看守は気味悪がって私と接触を持つのをやめました。元々独房で過ごしている身なので接触などないも同然だったのですが。

たかしくんは毎夜現れました。その度に私たちは他愛のない昔話に興じました。

暗闇に目が慣れてくると、たかしくんの姿がよく見えるようになってきました。彼の髪は撫でつけたようにぴたりと肌にくっついており、唇は紫色で、手足は氷のように冷たいのです。私は確信しました。

則之くん、どうかどうか、よく聞いてほしいのです。

たかしくんはあの台風の日、やはり死んでしまったのです。私とたかしくんと君で川の氾濫を面白半分に見物に行き、川にさらわれそうになったことを覚えているでしょう。いえ、忘れるはずがありません。

あれが私と君の初めての殺人なのですから。

逃げ遅れたたかしくんは私たちの両足に縋って「助けて」と言いました。覚えていますね？ 忘れたなどはまさか言いますまい。

そうです、あの時私たちはまるで示し合わせたかのように足を乱暴に上げて彼の、たかしくんの手を振り払って後ろを見ずに走って逃げました。

ずっと友だちとして過ごしてきた時間を忘れるために、私たちは必死に走りました。その後、たかしくんは行方不明になり遂に彼の死体が発見されることはありませんでした。

ですから私はほんのり希望を持っていたのです。実は彼は助かっていて、どこかで平和に暮しているのではないかと。そう考えなければ私は罪の意識で胸を掻き糞る苦しさに悩まされてしまうのです。たかしくんの事件の後、学校を出て社会の冷徹さに打ちのめされた私は、これ以上重荷を背負うことを拒絶しました。だからたかしくんはどこかで生きているという、とりとめのない幻想を現実としてきました。

でもたかしくんはやはり、死んでいました。きっと彼の身体は今も冷たい川の底にいるのでしょうか。何故、あんな残酷な真似をしてしまったのか。

子どもは素直な生き物です。私も君もたかしくんの家を嫉妬していたのです。裕福で差別を受けることのない家系の彼に、どうしようもなく嫉妬し、憎悪まで抱いていたのではないのでしょうか。

私たちが、これから先の未来を考えると必ず横たわってくるであろう差別問題を考えなくてはなりません。それは小学生であった私たちもひしひしと親兄弟の姿を見て痛感していた事実です。ところがたかしくんは同じ地域に住みながら、裕福な家庭と差別を受けない血筋でありますから、彼の将来は何の問題もないのです。

はっきり言いましょう。君も耳を塞ぐことなく聞いてください。

あの頃の僕らはたかしくんを友だちと言いながら、産まれが違うからと差別していたのではないのでしょうか。あれほど嫌っていた差別を僕らは自分たちで行っていたのです。何と呪われた行為でしょうか！ 差別されることで、別の差別を生むとは罪の深い行為です。

私たちの差別は殺意だったのです。だからあの台風の日、私たちはたかしくんを殺しました。

死刑の日にちが近づくにつれ、たかしくんが私の前に現れるのが夜だけではなく、昼日中にも現れるようになりました。

心と目を落とした床に顔だけが突出してあったり、顔を見ようと鏡を覗くとすぐ耳元に彼の顔があったり、眠ろうと横になると天井から手だけを伸ばしていたりするのです。

これだけははっきりと言えるのです。

たかしくんは、次は君のところへ現れるでしょう。何故ならもう私は死ぬのです。この手紙は死刑執行前の慈悲として書くことを許可されたものなのです。あと数分で私は死にます。

さようなら。

さようなら、則之くん。

私はもう死にます。たかしくんから逃れることはできません。今も、彼は私のことを見えています。にこにこ笑って昔のように、私に手を差し伸べて、ああこれ以上は書くことができません。もしかすると川でたかしくんの死体が見つかったのではないのでしょうか？だからたかしくんは水の牢から解放されて、私たちの元にやって来たのではないのでしょうか？確かにあの日、私たちはたか（字が乱れ判読不明）

敬具（筆跡が変わっている）

死刑囚からの手紙

<http://p.booklog.jp/book/26778>

著者：森山

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/next7/profile>

表紙画像：写真素材 足成様

<http://www.ashinari.com/>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/26778>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/26778>